

5 商業

江戸時代に近江商人・恵比寿屋岡田家、住吉屋西川家が管理していたオタルナイ、タカシマ、オショロ場所といった漁場の場所請負制が廃止され、漁業の門戸が開放された明治期時代になると、需要が高まる鯿を目指した商人や漁業家が、新開地に多く流入してきた。豊富に採れた鯿は、青山、白鳥、茨木家のような大漁屋を生み、船主に雇われた船乗りたちは、北前船という、大海原を渡るには危険を伴う構造の船で、高く売れるところを探して売りに行き、利潤を増やし、独立していった。近江にゆかりのある松前出身の商人たちは、こうした北前船商法の実践などにより、小樽の土地に商売の種をまいたかのように例えられた。倉庫を保有し取り扱う物資を増やすなどして、商売を発展させていった加賀出身の商人たちは、近江、松前出身の商人たちによって地均しや種まきがなされた土地に、肥料を与えたかのように例えられた。状況を見ながら有利なビジネスを展開し、日本の歴史に名を残すほどの資産家も現れた越後出身の商人たちは、豊富な実りをうまく刈り取る役に例えられた。小樽という土地は、このように進取の気性に富む様々なタイプの商人たちが活躍する場となった。

海産物、石炭、雑穀、繊維、雑貨など、様々な物資の取引を活発に行った商人たちは、積み下ろしなどの作業効率を上げ、取扱量を増やしていく方法を模索した。地元の有力者たちが意見を出し合い、防波堤、運河、埠頭の建設といった港湾整備の大事業が展開された。過去に例がないことの実践には、様々な未知の問題に直面することも当然、出てくるが、それらのひとつ一つを解決しながら成し遂げた大事業は、大量の物資を扱うことを可能にした。

さらに、所有する船を戦争のために提供した板谷宮吉や藤山要吉といった商人は、政府からの莫大な報奨金を得て、「船成金」と呼ばれ、高橋直治は、戦場になった国で不足する雑穀を買い占め、「豆成金」や「小豆将軍」と呼ばれた。昭和6年、板谷宮吉の資産は5千万円にふくれあがっていた。板谷宮吉の資産が突出していたとはいえ、次に続いた藤山要吉、石橋彦三郎も昭和6年の小樽市の一般・特別会計を合わせた399万円を超える資産を持っていたと言う。

「集まるは 物・人・金の 小樽かな」

まさに物・人・お金の相乗効果により、商都・小樽は著しい発展を見せた。こうした商人たちの華々しい活躍の裏に、深刻な経済、生活上の格差があったことは言うまでもない。第二次世界大戦前の、「仲仕」（港に停泊する船舶内で貨物の積卸しを行った）、「舢舨船夫」（舢舨船でそれらを運搬した）、「赤帽」（陸上雑役をした）、「台車積卸人夫」（鉄道駅構内で貨物積卸しをした）といった人たちは、低賃金で長時間の重労働を強いられ、「常夫」と呼ばれる「常備」以外の、「出面」「ゴモ」と呼ばれる日雇い労働者にいたっては、相当に水準の低い生活をしなければならなかった。人々が忍耐強く仕事をした時代。結果的に今残る歴史的建造物や小樽の大繁栄につながった。

忍耐強さは、ものづくりにおいても発揮された。職人は、造船、錨、おもり、帆布、旗、漁具、漁網、浮き玉等の海と関わるもの、土木、建設、金属加工などに関わるもの、繊維、衣類、家具、ストーブ、その他、様々な生活と関わるもの、菓子、酒などの嗜好品、花火、神輿、水引などの祭りと関わるものなど、熟練した技で今につながる様々なものをつくり、人々の仕事や生活を支えた。

裏路地は大通りに、大通りは運河につながるという街そのものの構造に似て、仕事の面でも細分化した仕事が必要な仕事や海につながるという特徴がある。そしてどの仕事も、小樽という土地が強固な地盤を持ち、着実な発展をしていくために、大きな役割を果たしたと言える。

「小樽には 海につながる 仕事あり」